

「日本人スペイン語学習者によるスペイン語の知覚および発話における音声的問題点」

泉水 浩隆（南山大学外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科教授）

スペイン語はしばしば日本人学習者にとって「発音がやさしい」言語であると言われる。確かに、母音の数や子音の種類、つづりの読み方の規則性が高いことを考えると、他の外国語と比べた場合、親しみやすく感じられることばであり、また、これがスペイン語を学び始めるきっかけの1つとなっているとも言えよう。

一方で、このような側面があるからといってスペイン語の音声面の学習は本当に「やさしい」のだろうか。似ているところがあるからこそ、逆に「むずかしい」ということもあるのではないだろうか。授業の現場での経験を通じ、筆者はこのような印象を持ち続けてきた。

本発表では、この点について、最初にスペイン語の音声教育の現状や教材における音声教育の扱いがどのようになっているか概観する。続いて、知覚・発話の両面から、具体例を交えながら、日本人スペイン語学習者が示す音声的な問題を分析する。まず、Sensui (2015) を基に、平叙文・上昇調疑問文・下降調疑問文・句末の4つのイントネーションパターンを例に、日本人スペイン語学習者とスペイン語母語話者の知覚にどのような違いが見られるか、実験的手法で分析した結果を紹介する。次に、泉水 (2014) で扱った、日本人学習者によるスペイン語発話の具体例、あるいは、別の機会に収集した音声データなどを示しつつ、特に韻律面を中心に、こうした例の中でどのような問題が生じているかを観察する。

最後に、日本語とスペイン語は、一見すると音声面における共通点・類似点が多く存在するように思われるが、日本人スペイン語学習者の知覚や発話の実例を観察してみると、こうした共通点・類似点があることが必ずしも「やさしい」ということと同義ではないと考えられ、相違点にももっと目を向けた指導が必要なのではないかということ述べてまとめとする。